

これってどうなの？

合言葉は24/7(トゥエンティフォー・セブン) ～テック企業の頼りは“休まず店を開く脱炭素電源”～

最近、30歳以下の人と話をして気がついたのだが、彼らはどうやら「セブン-イレブン」というコンビニの名前の由来を知らないらしい。もともと朝7時～夜11時までの営業を売りにしたこの店舗も、昨今は、すっかり年中無休の24時間営業が定着してしまったからであろう。英語でいえば「24/7」(トゥエンティフォー・セブン)である。一日24時間で週7日営業という訳だ。



発電の世界をこうした「お店」に例えるなら、太陽光発電は、本格的な営業(発電)の時間帯からして「ナイン・スリー」(午前9時～午後3時)といったところだ。雨や曇りの日には臨時休業である。風力発電は、風任せに店を開いては閉じる「時間単位の不定休」。原子力や火力は、定休期間(定期点検など)を除けば、年中無休のコンビニに近い。一部の火力は価格が高いため普段は休業しているが、再エネ商店が休業しちゃったときに助けてくれる「便利屋」である。また、最近増えてきた蓄電池は、お客から余ったものを買ひ、足りないものを売るという意味で、メルカリのようなものである。これも違う形の「便利屋」だ。

このところ米国では、Googleやマイクロソフトなどの大手テック企業が、原子力による電力を長期にわたり購入する動きが出てきた。発電所の操業が、基本的に24/7であることが改めて注目されているとのこと。

AIの普及により、データ処理を集中的に行うデータセンター(DC)の規模は年々巨大化し、その電力消費は膨大な量にのぼる。テック企業各社は、かねてから気候変動問題への貢献を掲げ、再エネなど脱炭素電源による電力の確保に努めてきた。ところが、DCは、まさしく24/7で休まず動き続けるため、「ナイン・スリー」の太陽光や、「時間単位の不定休」の風力の場合、これらの電源が発電しない時間帯の電力も併せて調達する必要がある。そこへいくと、24/7で発電する脱炭素電源の原子力は、DCにとっては気候変動対応のみならず、電力を安定的・経済的に確保するためにもピッタリの電源だ。

米国テック産業 原子力発電所からの買電契約の動き

2024.3	アマゾン:子会社がDC隣接の発電所から
2024.9	マイクロソフト:廃止済の発電所から(再稼働工場のうえ供給)
2024.10	Google:建設予定のSMR*から
2024.10	アマゾン:建設予定のSMRから(アマゾンはSMR開発のX-エナジーに出資も)
2024.12	Meta (Facebook運営) が供給事業者募集

*SMR:小型モジュール炉と呼ばれる新型炉

脱炭素社会の実現に向けては、引き続き再エネの導入も積極的に進める必要はあるが、お休みの多い太陽光や風力を増やせば、ますます「便利屋」の火力が重宝されるという皮肉なことも起こる。蓄電池という新たな「便利屋」は急速に増えているとはいえ、その規模は、まだまだケタ違いに小さい。トゥエンティフォー・セブンの脱炭素電源は非常に頼もしい存在なのである。



ヒロ・ミズカミ 代表 水上 裕康 氏

電力取引・発電用燃料取引のコンサルタント。クライアントの外資系投資銀行とともに、市場リスク管理を中心とした電力・燃料取引を電力会社に紹介。そのかわり、電力を中心としたエネルギー関係情報の発信を続けている。エネルギーフォーラム誌等に寄稿。

一橋大学商学部卒、米国ジョージタウン大学MBA(経営学修士) 電力会社で通算16年間燃料業務を担当 2020年(株)ヒロ・ミズカミ設立